

---

# 週刊ストーリーランド風ＳＳ～理想鏡

束田慧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

週刊ストーリーランド風SUS~理想鏡

### 【Zコード】

Z5237BA

### 【作者名】

束田慧

### 【あらすじ】

あるO・Sが好きな男に振り向いてもらおうと、「理想鏡」という怪しい鏡に頼る話。

1人の女性が夜の街を歩いている。

彼女の名は加賀見麗子。かがみれいこどこにでもいる平凡な〇〇である。ルックス普通、スタイル普通、仕事も普通。特に目立つ要素はなく、会社では影が薄い。

そんな彼女にも好きな人が出来た。同僚の芦谷康太あしやこうたである。

彼とは同期だが、特に接点もなく仕事以外で話す機会もない。だが彼の好みだけは、先輩と話しているのを偶然耳にし、知っていた。彼は脚が綺麗な女性が好みらしい。

彼女は自分の脚に目をやりつつ溜息を吐いた。

「はあ……こなんんじゃダメよね……。とても綺麗な脚とは言えな  
いわ」

決して太っているわけではないのだが、脚線美と言つには些かに上に足りない。そんな現状に落胆しつつ顔を上げると、見覚えのない店が目の前に現れた。

(こんな店あつたかしら?)

それは看板もなく店構えも古い、とにかくみすぼらしい店であつた。

だが、何故か惹かれた彼女は、まるで何かに引き寄せられるよう

に店内に入つていった。

店内には得体の知れない物が散在しており、どれも一様にほこりまみれであった。店の奥にあるレジらしき場所に店員と思しき人物が座つているが、深々とフードをかぶり年齢も性別も分からぬ。ふと、レジの前に置いてある物が気になつた彼女は、不気味さを

感じながらも好奇心を抑えきれなかつた。

それは大きな鏡であつた。

ダンボールか何かで出来た値札に『理想鏡』と書いてある。

(りそつきょう……つての読むのかしら? 変な名前ね……。でも  
けつこう安いわね。買つちゃおつかな)

名前は変わつていたが、見た目は普通である。古道具屋だからか  
値段も手頃だつたので、彼女はそれを買つことにした。

「すいません。これください」

「……」

「あの、これを……」

そう言つと店主は、しわくちゃの手を差し出した。

代金を要求しているのだろうと判断した彼女は、値札に書かれた  
金額をサイフから取り出しその手に上に置いた。店主はローブの中  
に手を引つ込め軽くお辞儀して、反対の手を『理想鏡』の方に差し  
出し『どうぞ』とジエスチャーした。

その合図にホツとしたのも束の間、これを抱えて帰るのかと少し  
後悔するのであつた。

『理想鏡』は大きさの割りに意外と軽く、何とか家まで運ぶことが  
出来た。

道中に何人かとすれ違つたが、暗かつたせいなのか誰一人として鏡  
を抱えた目立つ女に好奇の目を向けることはなかつた。

運ぶには大助かりなのだが、普段から男に相手されない彼女は、  
自分はそんなに魅力がないのかと被害妄想を抱いてしまう。

家に着いて一息ついた彼女は、そんな気持ちも忘れ寝室に鏡を置  
いた。ふと、鏡の裏を見ると何か書いてあるようだ。

『これはあなたの理想の姿を映し出す鏡です』

(何これ？ もう言いつひと？)

意味も分からぬまま『理想鏡』の前に立つと、

「……！？ これって…理想の姿……？」

あまりの衝撃に思わず声に出してしまった。

そこに映っていたのは、まるで別人。まさに彼女の理想を具現化したような姿であった。

原理は分からぬが、彼女の解釈はこうだ。

「この姿に近付けるよう努力せよ、と。

「こんなのは無理よ。顔とか全然違うし……。でも、顔は無理でもこんな脚がほしいなあ……」

と、ほとんど聞き取れないほど声で呟いた瞬間、『理想鏡』が輝いた。

(な、何！？)

目を開けると、そこに映っていたのは変わらぬ理想の姿……ではなかつた。

よく見ると一部分だけ変わっている。

(脚だけ元に戻つてゐる。壊れたのかしら？)

そこに映し出されていた脚は、紛れもなく彼女のものだった。他の部分は相変わらず理想の姿を映しているが、何故か脚だけが元に戻っている。

改めて自分の脚に失望しつつ、足元に目をやると、

(……！？ この脚ってさつきの…？)

何故か、彼女の鏡写じでない本物の脚が、先ほどの『理想の脚』になっていたのである。

そう、まるで鏡の中の脚と入れ替わったかのよつこ……。

(これって夢！？ どうなつてゐの…？)

ありえない現象を前につるたえる彼女。ドタバタとしている間に転んでしまい、そのまま意識が飛んでいく。

目を覚ますと、既に朝になっていた。

まつさきに鏡のことを思い出し、自分の脚に目をやる。

(夢……じゃなかつたのね。こんな鏡があるなんて……つて、もうこんな時間…？ 遅刻する…！)

もう一度鏡を調べようつと思つたが、時間に追われてそれどころではなかつた。

仕事が終わつたらまたあの店に行つてみよつと考えながら、最速記録で支度を済まし家を飛び出した。

急いだ甲斐あつて、その日は何とか遅刻せずに済んだ。

だが、鏡のことが気になつて仕事が手につかない。上司に何度も

怒られながら半日が過ぎ、昼休みになつた。

トイレに向かつた彼女は偶然にも、男子トイレで芦屋と先輩が話しているのを耳にした。

「加賀美つて脚綺麗だよなー。芦屋、お前脚フェチだろ？」

「誤解を招くような言い方しないでくださいよ。確かに綺麗な脚は好きですけど、それだけで好きになつたりしませんよ」

「だよなー。やっぱ女はルックスだよな」

中身も大事ですよ、と最後に芦屋が言つたのだが彼女の耳には届いていなかつた。

（そんな……せっかく理想の脚を手に入れたのに。やっぱり顔なのね）

だが、彼女は落胆することはない。

『理想鏡』があればこの平凡な顔ともおもいは出来るのだから。

その後、吹っ切れたように仕事をこなした彼女は、当初の予定通り昨日の店を探していた。だが、

（あれ？ おかしいな。この辺りだつたはずなんだけど）

1時間ほど探し回つたが、あの店は一向に見つからなかつた。

あれだけの店が1日で影も形もなくなるなどありえないことだが、彼女は特に気にした様子もなく、諦めて家路についた。

帰宅した彼女は、まっさきに鏡の前に立つた。

そこには昨日と変わらず、脚以外が理想の姿となつた自分が映し出されている。

つい数時間前まで鏡のことを怪しんでいた彼女だったが、特に迷いもせずこいつ告げた。

「その顔をください」

と、次の瞬間鏡が輝き、

（やつたわ！ やつぱぱつこの鏡は本物よ！）

脚の時と同じく、今度は顔が入れ替わったのである。

彼女はもう疑わなかつた。あの古道具屋が何者なのか、この鏡は何なのか、そんなことはもうどうでも良かつたのだ。だが彼女は、あえて他の部分はそのままにして翌日を迎えることにした。芦屋の反応が見たかつたのである。

そして翌日、彼女はまたしてもトイレの前で聞き耳を立てていた。

「加賀美つてかわいいよなー。脚も綺麗だし。まあそれ以外が残念だけど」

「そうですね」

「あれ？ 反応薄いな。お前知ってるか？ 彼女、お前に気があるらしいぞ」

などとデリカシーのない先輩の言葉は、その後の芦屋の言葉によつて全て吹き飛んだ。

「だから昨日も言つたでしょ、中身が大事だつて。加賀美つて何か暗いし、話しかけづらいんですね」  
(暗い……？ 私が暗い……？)

などと疑問を浮かべてみるが、自覚はあった。

だが、理想の体を手に入れることで自分に自信が持てたのだ。普段より明るく振舞えているつもりだった。

だが芦屋は、彼女の根幹にある性格を見抜き、それを否定したのだ。そのことが彼女を追い詰める。

他の部分を入れ替えるもダメ……この性格を変えなければダメ……。

そんな思いが頭を支配しようとしたその時、彼女は何かを思い出した。

(あの鏡の私、笑っていた……?)

そう、鏡に映ったその顔は入れ替える前も後もずっと笑っていたのである。交換する直前に自分が笑っていた覚えはなかつた。ならば交換した今も笑っているのは何故か……?

そこで1つに結論に辿り着いた。

鏡の中の彼女は、姿だけでなく性格も彼女の理想を反映していたのだ。きっと理想の彼女は明るい性格、だから笑っていた。そして、彼女が交換したのは顔と脚だけ。性格までは交換していない。ならば話は簡単だつた。

全てを交換すればいいのだ。

そして、彼女は決心した。

そのことに気付いた彼女に待つてはいる余裕などなかつた。

体調不良を理由に早退した彼女は、全速力で帰ると、荷物を放り投げて鏡の前に立つた。

そして一言、

「あなたの全てを、私にください」

光を取り戻した彼女は自分の体を見る。

全てが変わっていた。完全に理想の姿になっている。そして、気分もいい。今までの自分とはまるで違い、今なら何でも出来そうな気分だつた。

だが、顔を上げると違和感を覚えた。

目に映るのは今までの自分の姿。そこまではいい。

(笑つてゐる……?)

田の前の自分が笑つてゐる。全てを入れ替えたはずなのに笑つてゐる。

何かが違う。

その笑いはどこかおかしい。そう、まるで嘲笑するかのようだ。彼女は怖くなり、その場から逃げようとする。だが、

(何これ!? 動けない!)

どういうわけか指一本動かない。声も出ない。

出ないはずなのに、鏡に映つてゐるはずの自分が突然口を開いた。

「じゃあね。『理想の私』」

そう言つて、『今までの自分』は部屋を出て行つた。

鏡の中に閉じ込められた『理想の自分』を残して。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5237ba/>

週刊ストーリーランド風SS～理想鏡

2012年1月14日15時04分発行